

## ＜<sup>サタイア</sup>諷刺の言葉＞

— 『精霊の機械作用』を中心に —

上田仁志

＜<sup>サタイア</sup>諷刺の言葉＞にはつねに何かしらアンビギュアスなものがつきまわっている。

ジョナサン・スウィフトの諷刺作品『桶物語』は1704年に匿名出版されたが、この書物は冒瀆の書として大いに物議をかもし、これを発表したことで作者はその信仰を疑われもし、聖職者（スウィフトは当時英国国教会系の教区牧師でありまたダブリンにある聖パトリック寺院の聖堂参事会員であった）としての経歴にも相当の痛手をおった。スウィフトは後に（1710年第五版）「弁明」を付して、自らの態度を明らかにさせ、作者の意図が「宗教と学問における無数の途方もない腐敗」の諷刺にあって、決してキリスト教の教義そのものの価値をおとしめるものでもなければ、教会（英国国教会）の名誉と権威を蔑ろにするものでもない、それどころか腐敗・墮落を矯正して信義と正しい価値とを擁護するものである、と釈明せざるをえなかった。スウィフト自身が述べていることは、少なくとも大筋においては真実であろう。つまり作者の「真意」はあくまでも、宗教と学問の誤用と腐敗を材料にした一篇のパロディを仕立てあげることであって、宗教（と国家）それ自体の権威と価値を否定しているのでも滑稽化しているのでもない。作者が攻撃の対象にしたのはあくまでも宗教と学問とを自分の都合で運用する、墮落した人間たち、とりわけ「近代才人」連<sup>1)</sup>である。したがって諷刺の矢が鋭ければ鋭いほど、また機知による笑いの効き目が強ければ強いほど逆に宗教や学問や国家の権威を守ろうとする作者の「真面目な意図」が、読者にとっても、あらわになる仕組み一のはずーであった。しかし、実際にはそうは解されなかった。当時においても、その後の約2世紀を通じても、『桶物語』の文学的価値は、現在では広く認められているが、はたしてそれが作者のいう通りに「敬虔」な作品であるか否かは、議論の分かれるところであろう。

ところで、Kenneth Burkeは“Poetic Categories”<sup>2)</sup>のなかで、「思考の装備(道具)」(mental equipment)を組み立てる方法(様式)として種々の文学ジャンルを検討しているが、「諷刺」satireについても一つの見方を提示している。Burkeによれば、諷刺とは実際は「自分自身のなか」にある弱みや誘惑を、「他人のなか」に発見して攻撃する技である。諷刺家は諷刺の対象である対立者の見解を難じるさいに、両者がひそかに分ちもっている悪徳のイメージを利用する。それゆえ、諷刺家は自分自身のなかの悪徳を「満足させる」とともに「処罰する」のである。つまり諷刺家にとって、〈諷刺の言葉〉はたんに他者を攻撃する武器ではなく、自分自身を鞭打つ道具—両刃の剣—でもあるということである。諷刺の効果が大きければ、そのぶんだけ自分自身を傷つける度合いも大きい。スウィフトやユウエナリウスのような諷刺家につねにつきまとっているこうした傾向を、Burkeは「戦略的な曖昧性=多義性」(strategic ambiguity)と呼んでいる。

本稿でのわれわれの狙いは、諷刺の言説を特徴づけているこうした性格を、主として「修辭的」な観点から考察することにある。つまり〈諷刺の言葉〉がもつ「戦略的曖昧性」が、諷刺する対象の権威や意味づけを無効にし、価値下落を起こさせ、あげくのはてにはあらゆる自己同一性を、(諷刺家自身の同一性をさえ)、破壊つくすありさまを吟味するとともに、それにある程度の定式化をほどこすことにある。ここでは『桶物語』の付録のようなかたちで、もう一つの作品『書物戦争』とともに収録・刊行された『精霊の機械作用についての講話、ある友人宛ての書簡断片』(*A Discourse Concerning the Mechanical Operation of the Spirit. In a Letter to a Friend. A Fragment*)<sup>3)</sup>をとりあげて、スウィフトの〈諷刺の言葉〉を分析してみよう。『桶物語』という書物の「悪評」の原因が、主として、執拗なまでに露悪的なこの小品にあったとみなされるうえに、いわゆる文学的達成度がどうであるかはともかくとして<sup>4)</sup>、これがスウィフトの諷刺の骨法である言葉の「修辭的暴力」の強力かつ見事な実例になっていることは動かしがたい事実である。ときに諷刺の道具(言葉)が強すぎて、作者自身の手にはさえあまるとしても逆にそのことが、つまり、作者自身の思いもかけなかった「言葉の力」こそが、スウィフトの「諷刺」を「諷刺」たらしめている所以であり、凄まじいまでの諷刺的破壊力の秘密であると考えられるからである。

『精霊の機械作用についての講話』（以下『精霊の機械作用』と略記）は、王立協会（グレシャム・コレッジ）の関係者と想定される「ある人物」が、友人 T・M<sup>5)</sup>に宛てた「書簡」のなかで自分の学問的発見についての見解を叙述する、という体裁で書かれている。実際に18世紀の初頭において、こうした「書簡」は知識人、科学者のあいだでかなり流行していたらしく、スウィフトはそれのパロディとしてこの作品を物したのである。全体は「序」と「本論」（第一部・第二部）から構成され、第一部は「神がかり的熱狂家」（enthusiast）の集会、第二部前半は「熱狂」（enthusiasm）の伝道者、第二部後半は「熱狂」の歴史についての考察が述べられている。「神がかり的熱狂家」とは非国教徒ないしはピューリタンを意味する。したがって、『精霊の機械作用』の主題は、第一義的には、「内なる光明」（inner light）を強調し、「靈感」（inspiration）を尊び、「聖霊」（the Holy Spirit）との交通を説く、非国教徒、とりわけピューリタンを嘲笑することにある—彼らは直接それと名指されることはないが、終始一貫あてこすりと愚弄を受ける—が、それと同時に、この作品はデカルト＝ホップズ流の疑似科学者である「書簡作者」の論理まがい・実証まがいの言説を通じて、当世流行の機械的唯物論をも諷刺しようとする。つまり「中心主題」と「語り」という、内容・形式の両面に互る、いわば二重の身振りによって諷刺が演じられている。このように、スウィフトは、『桶物語』などの場合と同様、かなり手の込んだかたちで作品を提示している。

第一部冒頭における作者の手口は以下のようなものである。『精霊の機械作用』の「著者」は、マホメットが天国への旅立ちに際して、他のすべての乗物を拒絶した後、自分自身のロバに揺られて天国へ行きたがった、という言い伝えを述べ、この人間を天国に運ぶロバの「特技」が自分の論考の主題であるが、それを字義通りに語るのでは諸方面に迷惑がかかる恐れがあるため、寓意によって「ロバ」（ass）という語を「才能あるもしくは見識のある教師」（gifted or enlightened teacher）に、「乗り手」（rider）を「狂信的聴衆」（fanatic auditory）に置き換え、今後の研究主題は「この教師がいかなる方法でその才能（gift）もしくは精霊（spirit）あるいは光明（light）を獲得するのか」に向けられると語る。

「普遍的自然と人類一般を念頭におくという大目的を常に自覚してきた」という「著者」は「狂信的な素質ないし熱狂という性質ほど、世界中のあらゆる国民あらゆる時代に普遍的に共通な身体の調子ないしは心の性質はほかにない」とし、この性質が個人・集団の別なく作用し、「歴史上最大規模の革命」さえも引き起こしてきた旨を述べ、政治上および学問上の様々な出来事や探求が、すべて「熱狂」の産物にはかならないことを強調する。ついで、「著者」は「この植物〔＝熱狂〕は一方では帝国と知識の分野に根づくと同時に、他方聖なる分野でそれ以上に深く地中に根を下し、その伝播も一層広範であり」、自分の論考の主題が「宗教的熱狂」の分析にあるとする。（その際「著者」は「熱狂」という語に「心もしくはその機能を物質を越えて高める働き」という定義を与えている。）

さらに「著者」によれば、「宗教的熱狂」（＝「精神を発出させる、つまり物質の境界を越えて飛翔させる方法」）には従来、「神の直接的行為」である「予言」（prophecy）ないし「靈感」、「悪魔の直接的行為」である「悪魔つき」（possession）、そして「強烈な想像力、怨念、激怒、不安、悲嘆、苦痛」等の「自然的原因」によるもの、の三つの方法があるとされてきたが、これらに関してはすでに豊富な議論がなされているため、自分が扱うのは、第四の「宗教的熱狂」、すなわち「純粋に熟練と機械操作の結果」であるものであるとし、「わがブリテンの職人たち（British Workmen）〔＝ピューリタン〕が現在用いている精霊の機械操作（Mechanical Operation of the Spirit）」、この「商売」の仔細を述べることにすると語る。このように作者の諷刺の筆にかかっては、信仰厚きピューリタンの説教者とも言えども、せいぜい民衆の無知につけ込むのに熱心な商売人にすぎず、彼らの仕事はせいぜい人工的に体内の精霊<sup>スピリット</sup>＝精気を操作する職人芸にすぎなくなる。「著者」は自分が説く“spirit”が「外部から働く超自然的な援助」（supernatural assistance approaching from without）の意味ではなく、「完全に〔体の〕内部から発するもの」（proceeding entirely from within）である点を強調している。「靈感」にせよ「聖霊」にせよ、すべて“spirit”であるから、それらは「発汗」（perspiration）の防止によってもたらされるものであり、「汗ほど機械的な光明を多く消費するものはほかにない」のである。

ピューリタンの教義（「内面の光」の重視など）への愚弄・あてこすり

はまだまだ続くが、ここで多少ともピューリタンの「熱狂」に対するこうした「諷刺」の背景説明が必要であろう。17世紀の英国では、いささか過剰気味なピューリタンの「熱狂」に対して、さまざまな立場、方面からの批判・攻撃が生じた<sup>6)</sup>。ロバート・バートンの『憂鬱の解剖』(1621)やスウィフトの『桶物語』には英国国教会の牧師である著者たちのピューリタンに対するあからさまな拒絶がみられる。このほか、カソーボンやヘンリー・モアの著作は前二者ほどには明らかな党派心はみられないものの、やはり「熱狂」が自由と合理性双方にとっての脅威であることを警告している。これらの書物は共通して「神による靈感の内なる光」(the inner light of divine inspiration)に関心をよせ、ピューリタンの集会において、予言者の役割の顕示として広く受け入れられていた「熱狂」の形態に非難の声を上げている。バートン、モア、スウィフトらの批判はもちろん一義的には国教会派の立場からなされた宗教的なものであるが、その一方で、政治(思想)的な理由によるところも大きかったことを見逃してはならない。次の引用はスウィフトの『説教集』からのものである。

わが国は過去百年のあいだ二つの敵すなわち旧教徒と狂言者の跳梁を許してきた。彼らはかわるがわる血と虐殺で国土を汚し、一時は政府と国教会を破壊さえた。(中略)幸いにも旧教徒はわれわれの賢明な立法措置と彼ら自身の力不足のおかげで、目下のところ国に害をなす可能性はきわめて薄い。(中略)だが、狂信者については、別の見方をするのが肝要であろう。近年彼らは幸運ないしは力に恵まれたためか、あるいは生来の狡猾を利用してか、国民同士の不和を煽り立てその分裂を図るのに成功した。彼らの間違った考えや策謀に反対する者は、たちまち政府にたいする不満分子と言い触らされる。(中略)この非国教徒の存在こそは、現在わが国に猖獗を極める憎悪と敵意の主要な原因なのである<sup>7)</sup>。

見られるとおり、ここでスウィフトはピューリタン(非国教徒)の「熱狂」あるいは「狂信」が宗教的のみならず、政治的害毒であるとして非難の声を上げている。17世紀の「熱狂家」すなわちピューリタン(非国教徒)たちは、個人の宗教的・内面的生活を越えて、自分の「内なる光」を公の場

で他人に伝達することを欲した。彼らは自分自身を民衆の指導者であると  
考え、指導者としての本分は「予言者」として尊敬を受けることであった。  
スウィフトなどの政治的宗教的な保守派にとっては、ピューリタンの説教  
者・指導者の言動は過激で危険なものであり、「熱狂」「狂信」として非  
難されなければならないものだったのである。

『精霊の機械作用』の諷刺が一方で、以上述べたようなピューリタン（非  
国教徒）の政治・宗教的「熱狂」を主題としながらも、他方で、それを記  
述する虚構の「書簡作者」なる「ペルソナ」を作者スウィフトが設定して  
いることは注目されるべきである。スウィフトは神をも恐れぬ「唯物論的  
思潮」に対してはしばしば保守的・良識的英国国教徒の立場からの批判を  
加えている<sup>8)</sup>ことから、この「書簡作者＝語り手」の語りそのものが、  
きわめてアイロニーに満ちたものであることは明らかである。スウィフト  
はここでも彼のいわば十八番である「帰謬法(不条理への還元)」(reductio  
ad absurdum)を用いているのであり、「熱狂」の「学問的分析」を行う  
「書簡作者」の言説そのものが徐々に正気を失い始め、やがて最後には「狂  
気」そのものとみまごうばかりに極端に走るさまを描いている。「書簡作  
者」の結論の要約「精神(霊)的なものはすべて物質的である。ホッブズ  
や科学者がこれを証明してくれた。すべての宗教は実は性欲の倒錯だ。」<sup>9)</sup>  
とはそうしたものである。

『精霊の機械作用』がデカルト＝ホッブス流の機械論的唯物論のパロディ  
であるのはみやすい。ここでの spirit という言葉自体まず第一にデカルト  
から由来したものであるはずだ。スウィフトはデカルトの創意を借り受け  
てそれを極端に歪曲してみせている。「思惟するもの」(＝精神)と「延  
長をもつもの」(＝身体)との峻別を説いたデカルトは、精神と身体を媒  
介する機能をもつ実体として「動物精気」を想定した<sup>10)</sup>。デカルトによれ  
ば、生者と死者の相違は精神の有無によって決まるが、死体が熱と運動を  
失っているのは、精神が不在であるためではなく、反対に、「人が死ぬと  
き、熱がなくなりかつ身体を運動させる役目をする諸器官がこわれるから  
こそ、精神が去るのだ」と考えられる。デカルトはまた人間を時計または  
自動機械にたとえ、人間の死とは要するにこわれた機械が運動をやめた状  
態であるという「人間機械論」を唱えた。デカルトによれば「動物精気」  
とは脳からでる細い糸または管のあいだをながれる「きわめて微細な空気

または風」のようなものであるが、このような一節をつかまえて、スウィフトはすぐさまそれを諷刺のなかにとり込み、パロディを作り上げる。『桶物語』の第八章でピューリタンの教義を「風神派」(the Aeolist)の説(「天地万物の原因は風であって、この宇宙全体は当初この原理から作られ、最後には再びこれに帰着する」「われわれが人間の構成的形質を、Spiritus, Animus, Afflatus, Anima 等々の名で好きなように呼んでも、結局それらはみな風のさまざまな名称に過ぎず(以下略)。)」として描いているのはその例である。

“spirit”という言葉はホブズの『リヴァイアサン』(1651)(とくに第三十四章「聖書の諸篇における、霊、天使、および靈感の、意義について」)にも見られる<sup>11)</sup>。スウィフトは『精霊の機械作用』における「機械的唯物論」の諷刺として、より直接的には、デカルトよりもホブズを念頭においていたふしがみられる。「練達な学者の意見」として述べられる次の下りは、ホブズ流の唯物論的な語彙と方法で、人間の精神(活動)が全体として生物あるいは機械の法則によって支配されているという解釈(霊animaを動物animalで説明しようとする)をパロディ化しているものである。

脳髄は単に小動物の集まりであるとされ、それらは非常に鋭い歯と牙をもって互いにわれわれの目に映るような格好に凝縮し合い、その実例はホブズのリヴァイアサンの絵<sup>12)</sup>(中略)などに見られる由である。(中略)あらゆる発明は実は何匹かのこれらの小動物による毛細神経への咬傷に由来し、ここから分かれた神経のうち三本は舌へ、二本は右の手へ伸びることによって創意が生まれるとされる。これらの動物は体がきわめて冷たく、われわれが吸い込む息を食料とし、その排泄物がわれわれの啖であって(下略)。<sup>13)</sup>

ところでこうしたホブズ流の機械論による心理学は無神論を標榜するものと解されたから、国教徒も非国教徒もほとんどの宗教家はホブズ(流の唯物思想)を嫌った。またそれに対して、ホブズ自身はピューリタンを嫌っていた<sup>14)</sup>。スウィフトのやり方というのはこの互いに反目しあっていた者同志(ピューリタンと唯物論者)を一つに結びつけてしまうという

ものである。『精霊の機械作用』においてスウィフトの「書簡作者」は、あらゆるものは「身体」であり、すべての思考は「感覚」から生じる、という見解を採用しているが、これは言うまでもなくホッブズの主張に由来している。ピューリタンの「熱狂家」は何よりも「神の直接的行為」である「靈感」（原義は「息を吹き込むこと」）を尊ぶが、「書簡作者」は“inspiration”の一部である“spirit”を「霊（精神的）」なものとはみなさず、「物質的」な“spirit”すなわちデカルト＝ホッブズの言う“animal spirit”と解釈し、「狂信家」の「靈感」を「性的欲望」に帰せしめる。「相反する者は互いに結びつく」という命題はスウィフトのしばしば用いるいわば常套手段に属するが、こうして『精霊の機械作用』においては、お互いに忌避しあっている「ピューリタン」と「唯物論者」（ホッブズ主義者）とが「似た者同志」として等号で結びつけられてしまうのである。

## II

『精霊の機械作用』の結論部分に顕著な「宗教的熱狂」を「性衝動」に帰する考え方をフロイトの「昇華」の理論を予見したものとして評価する学者・批評家（J.L.Clifford, Norman O.Brown など）がいるのは事実だが、多かれ少なかれ、19世紀の実体論的科学観に基づくそのような理論の限界が明らかになっている今日では、同じく精神分析の理論に結びつけるにせよ、「本能」だとか「性欲」などといった生物学的な語彙よりは、むしろ、『夢の解釈（夢判断）』や『機知—その無意識との関係』などにみられる、無意識と言語の問題に対するフロイトの洞察—一言語論的ないしは修辞論的—な一とのかかわりの方がはるかに興味深く、重要な主題であると考えられる。スウィフトの「諷刺」が作者の狙いや信条にもかかわらず、あるところで作者の意図を超えて機能してしまう瞬間、＜諷刺の言葉＞が両面価値的な性格—Burkeの言う「戦略的曖昧性」—を帯びてしまう瞬間は、ひそかに、しかし、確固としてテキストの内部に存在する。たとえそれが「実証可能」な実体ではありえず、つねに「修辞的」な効果として、事後的な考察にゆだねられるほかはないものであるとしても。

Dennis Donoghue は、スウィフトがどこまで「熱狂的宗教家」の奢りを論駁しようという本然の欲望に促されたのか、あるいはまたどこまで言語

そのものの特質との共謀によって、自身の信条的制約を踏み越えたのかを確定するのは興味ある問題である、としたうえでそれが、厳密には信条の問題ではなくて、自身の信条にもかかわらず、作者が世間をどうしたら悩ませてやるかにこだわっていたその度合いの問題である、と述べている<sup>15)</sup>。Donoghue の指摘の優れた点は、〈諷刺の言葉〉のもつ「価値下落的特質」が、たんにスウィフトの得意技であったということではなくて、それが、言語に本来的に内在する傾向でもあり、〈諷刺の言葉〉がときとして作者の信条（信念）をさえ裏切ってしまうことの必然性に眼を向けたことである。テキストは必ず、作者（表現主体）の意識が十全には制御できない「暗闇＝無意識」を孕み込んでいる。この「無意識」をテキストの「修辞性」とみなすというのが、ここでのわれわれの立場である。われわれの主たる目的はこのテキストの「無意識＝修辞性」を明るみに出し、その定式化を試みることである。

そうしたわれわれの目的にもっとも適った材料は、端的に言って、「言葉遊び」ないしは「地口」のなかに求めることができる。「言葉遊び」はスウィフトの「諷刺」として本質的なかつ最重要な要素であり、これをたんなる「言葉の遊び」として軽視することはできない。オーガスタン時代（1702-14）の英国において「諷刺」はひとつの盛期を迎えていた。この時代を代表する詩人はポープであるが、スウィフトにしる、またそれに先立つ王政復古期の詩人ドライデンにせよ、彼らは「地口」あるいは「言葉遊び」について非常に意識的であった。「諷刺」を文学作品（表現）としてみた場合にもっとも忘れてはならないことのひとつは、この時代の作者（表現主体）が何よりも言葉の「媒介性」あるいは「モノ性」（thingishness）に対する意識的考察を作品のなかで実践していたことである。David Nokes はポープとスウィフトが「ドゥーブル・アンタンドル（二重の意味）」による啓示というジョイス張りのトリックを分ちもっていた、と述べている<sup>16)</sup>。ジョイス自身はこれを「エピファニー」（顕示）、すなわち古い言葉に磨きをかけ新しくする言語の魔術と呼んだ。Nokesによれば、スウィフトのパンはエピファニーというよりは「インカーネーション」（受肉）、すなわち言葉がたえず肉体化する過程ということになる。実際たとえば、『桶物語』および『精霊の機械作用』のなかで、“spirit”という語ほど多義的かつ即物的に用いられる言葉はない。「動物精気」（animal spirits）が、

「精神」(mind)「肉体」(body)「魂」(soul)の三者を、いずれの機能にも完全に属することなく、結びつけるものとまじめに考えられていたことは既に述べたが、17～8世紀を代表するベイコン、ホップズ、バークリーなどの様々な哲学者のあいだでも、“spirit”(という用語)の精確な本性、状態、意味に関しては、たえずある種の曖昧さがつきまとっている。一方スウィフトはあたかも揮発性の物質が身体内部で蒸発と凝縮をくりかえす、その状態変化のように「精霊<sup>スピリット</sup>=精神の機械作用」を提示する。誰もがそれを自明のこのように口にしていながら、そのじつ、いざ正体とはなると何も知らぬに等しい、“spirit”というのはなほだ厄介で訳の分からぬ言葉が、ここではあたかもそれ自体目に見え、手に触れることができる物質のように扱われている。スウィフトにしてみれば、「言葉は風に過ぎ」ないとしても、同時に言葉が「重くて嵩ばった物質である」のは「言葉がわれわれの心に残すあの強い印象からも明瞭」なのである。このようにスウィフトはピューリタンの「靈感」(inspiration)の主張をたえず「字義的」な意味(息、風、世界霊)へとずらすことで、それが「物質」にはかならないことを「証明」してみせるのである。

おそらく、スウィフトの「諷刺」のこうしたきわめて「修辭的」な本領を最も早い時期に、かつ最も適確に見抜いていたのは、William Empsonであったと思われる<sup>17)</sup>。Norman Brownは“The Excremental Vision”のなかで<sup>18)</sup>、スウィフトによる「昇華の教義」の予見をいち早く感知したという名誉をEmpsonに帰しているが、Empsonが明敏であったのはむしろ次のようなことに対してであったはずだ。すなわちスウィフトの「諷刺」は、ピューリタンの「宗教的熱狂」を《深層(性欲)→表層(宗教活動)》という生物学的因果関係によってとらえようとしたものでなく(そうみえるのはわれわれがたんにそういった思考図式に馴らされているからにすぎない)、あくまでも《表層(言葉)→表層(言葉)》という言語の問題として提示しているのであると。「靈的(=精神的)なもの」と「肉的(=物質的)なもの」は確かに通底している、しかし、それは言葉の上でのことである。「宗教的熱狂」は「機械的操作」によって容易にもたらされる。なぜなら、「靈感」も「聖霊」もともに“spirit”である以上、それは「発汗」(perspiration)のいかんによって調節しうるからだ。こんなことが可能なのも、それらがほとんど「意味」(signified)を欠いた「言葉」

(signifier) であり、換言すれば、それらが一つの「言葉」から別の「言葉」への「翻訳」(translation)であるからである。Empsonの一節を引用すれば、「言葉はここでは彼〔スウィフト〕に都合よく働く。というのは精神的な単語はすべて物質的比喻に由来するからである。彼がこの間の消息をたびたび経験するうち、こういう才知を働かす楽しみは信仰をゆるがすほどのものとなったにちがいない」ということになる。

スウィフトの〈諷刺の言葉〉の特質を定式化するにあたって、われわれは Freud<sup>19)</sup> と Empson という二人の優れた「修辞理論家」の考察に拠るのが一番よいように思われる。ここではまず、Empson がエッセイ “Double Plots” のなかで正当にも引用している、『桶物語』の次の一節に注目しよう。

後代の学識者から本書の注解者に指名されるであろう人々に対して私は、ある晦渋な論点に関してはくれぐれも細心の注意をもって読み進まれるように望む。「真の大悟者」でない者は、特に簡略化のためにある種の「神秘」の説明を一つにした (certain arcana are joined for brevity sake) ような若干の難解な文脈から性急に軽率な結論を下すことのないよう注意されたい。これらの神秘は実地では分離されねばならない (which in operation must be divided)。<sup>20)</sup>

ここでスウィフト (正確には『桶物語』の「語り手」) は読者に自分の作品の「読み方」をなかば「解説」している。それは、テキストにはつねに「謎」が秘められており、通常は二つ (あるいはそれ以上) の別々の意味ないし事柄がとされるものが、言葉の上では「簡略化のために」合体されているため、読者はすべからくそれらを「分離」して理解しなければならないということである。ところで、このことはまさしく「二重語義」としての「地口」の性格を語るものではないだろうか。「地口」とは「同音意義による駄洒落」であり、したがって、音声上 (形式上) の「類似」によって、意味上の「不一致」が一つに結びつけられる類いの「言葉遊び」を言う。“spirit” などのように一つの「語」のなかにいくつかの「意味」がある場合 (「幽霊」「酒精」など) も「地口」になるが、Lettuce alone. = Let us alone. 式の音の類似によってのみ成立するものもあり、こちらの

ほうがナンセンスの度合いが強くなる。スウィフトの「諷刺」の大きな特徴は先述したように、「言葉」と「言葉」の結合、あるいは「言葉」から「言葉」への翻訳として理解される。スウィフト自身が述べている「簡略化のための合体」とは、基本的に「地口」と相似た構造をもつものである。

この「簡略化のための合体」とは、一方で、Freudが言う「夢の作業」にみられる「機制」の一つである「圧縮」を想起させもする。「圧縮」(condensation)とは、Laplanche = Pontalis<sup>21)</sup>によれば、「無意識的過程の機能の本質的様相の一つ」であり、「ただ一つの表象がそれだけで、数多くの連想の連鎖を代表し、その表象はそれらの接合点をなす。」さらに注目すべき説明としては、「圧縮により潜在内容より顕在内容のほうが簡単になっている。それは簡略化された翻訳である。」という記述もみられる。

『精霊の機械作用』のなかでも、この「圧縮(簡略)された謎」は随所に見られる。spiritについては既に何度も言及したから、ここでは「神(天使)」と「悪魔」の「合体」の例を見ることにしよう。<sup>インスピレーション</sup>「靈感」と<sup>パセーション</sup>「悪魔つき」の違いについては前者が神の、後者が悪魔の直接行為であるという説明がみられた。ところで「著者」は「人間はキリストと悪魔の協力関係を打ち立て、『裂けた舌』〔天使=〕と『裂けた足』〔=悪魔〕の間の類似を確認する」が「われらイギリスの熱狂的な説教者の振舞いや決まり文句が本当に神からの靈感なのか、それとも悪魔つきなのか」は未だに決着のつかない謎である、と言う。ところで「神がかり的熱狂」(enthusiasm)とは語源的に言う「神(thous)が取りついた状態」を意味するというのが、ここで用いられる“enthusiasm”には当然「悪魔に取りつかれた」状態という含意があるはずである。両者は本来相反するものであるが、それらは外見では区別できないほどに一つに合体している、というのである。これに限らず、一般に、「聖なるもの」または「清浄なもの」と「悪しきもの」または「汚れたもの」との結合はスウィフトの「諷刺」に頻出する。スウィフトの「肛門=排泄」への嗜好は、Norman Brownがつとに指摘しているとおりだが、「上部器官」(頭脳・理性)と「下部器官」(生殖と排泄)とが合体した「人間の身体」こそはスウィフトの「諷刺」においてもっとも「両面価値的」な存在として、繰り返し焦点をあてられた主題であったとすることができる。

Freud は「圧縮」と並んで「置き換え」を「夢の機制」の一つに上げているが、これもまた、スウィフトの「諷刺」を考える際に有効な概念であると言えよう。「置き換え」(displacement)とは「ある表象のアクセントや関心や強度が、その表象を離れ、別の表象へ移ることができるという事実をさす。その場合、この第二の表象は、もともとあまり強いものではなく、第一の表象とは連想の繋りで結びついている」と言う。「圧縮」が言わば一つの「記号表現」に複数の「記号内容」を結びつける言語の機制であるのに対して、「置き換え」は一つの「記号表現」から別の「記号表現」へのアクセントの移動ないしは横滑りとして理解されるだろう。この場合、記号連鎖は意味上・音声上の「類似性」による (Jakobson の言うところの)「隠喩」的なものもあるが、ほとんどの場合はむしろ「近接性」に基づく「換喩」に近いと言ってよい。

この「置き換え」の例としては、「蒸気」(vapour)がある。「蒸気」とはスウィフトにおいては“spirit”の別名はかならない。「精神」の異常、すなわち「狂気」とはスウィフトによれば、体内の「蒸気」の過剰が原因であり、それが頭に上って理性に狂いを生じさせた場合、時として、「帝国の征服」や「学問上の偉大な発見」という大事業をも引き起こす。しかし一方で、この同じ蒸気が「肛門に下降すれば、それは痔になって終わる。」これは、『精霊の機械作用』における宗教的「熱狂」の操作にもあてはまる。この「蒸気」はまた「空気」「息」「風」「言葉」「学問」というに、自在に、ほとんど「意味」の拘束から解放されたかのように、その連鎖をつなげていく。このようにスウィフトの「諷刺」において「言葉」はつねに別の「言葉」へと「翻訳」され、「結合」と「分離」を繰り返し、さらにまた新たな「言葉」を生み出していくのである。

以上、スウィフトの「諷刺」を「言葉」の観点から、言い換えれば、「修辭性」の観点から検討してみた。もとより『精霊の機械作用』などの作品において作者スウィフトは、かなり念入りに「諷刺」の筆を費やしているものと考えられる。しかし、作者が作品を仕上げるにさいして、どこまで意識的であったかとは全く違う次元で、<諷刺の言葉>は、「作者」の意図しなかった、あるいは「作者」の意図とは異なった、過剰な部分—「謎」—を含んでしまう。スウィフトの狙いが「英国国教会」を非国教徒たちの「内なる光」から護ることにあったとしても、<諷刺の言葉>は彼自身意

識していなかったかもしれぬある「疑い」をかいまみせることになっている。

スウィフトがたえず諷刺してやまなかった「熱狂」ないしは「狂信」は国家、教会、アカデミーすべての分野において「一つの原因から」同様に生じるものであるとされる。スウィフトの「諷刺」において「政治」と「学問（科学）」と「宗教」、あるいは「精神的なもの」と「身体的なもの」等は不可分であり、通底しあっている。それらを媒介するものが「言語」（ことば）である。作者はそのことを十分認識していたであろうが、そのようにすべての分野がつながりあっているスウィフトの「諷刺」においては、「一なるもの」の腐敗は「他なるもの」の墮落に通じ、「聖なるもの」は「俗なるもの」とともに汚されざるほかないのである。

## 注

- 1) いわゆる「新旧論争」においてスウィフトは彼のパトロンであった外交官テンブル同様「古代派」であった。スウィフト『書物戦争』参照。尚、G・ハイエット、『西洋文学における古典の伝統』（下）、柳沼重剛訳（筑摩叢書、1969）、p.8-31. には、このあたりの事情がまとめられている。原書は1949年刊。
- 2) Kenneth Burke, *Attitudes Toward History*, (Berkeley: University of California Press, 1984), p. 34-91.
- 3) Jonathan Swift, *A Tale of a Tub and Other Works*, ed. Angus Ross and David Woolley (Oxford: Oxford University Press, 1986). 邦訳には、スウィフト、『桶物語・書物戦争・他一篇』、深町弘三訳（岩波文庫、1968）および『スウィフト政治・宗教論集』、中野好之、海保真夫共訳（法政大学出版局、1989）がある。本稿では主として後者の訳文を使用させていただいた。ただし、文脈等に応じて、字句の訂正を加えた箇所がある。
- 4) Irvin Ehrenpreis, *Swift: The Man, His Works, and the Age*, vol.1, (London: Methuen, 1962), p.241. Ehrenpreis によれば『精霊の機械作用』は、部分的には優れた箇所を含んではいるものの併せて出版された『桶物語』や『書物戦争』に比べると、文学作品としては著しく価値が低いとされている。またスウィフト自身も、「弁明」のなかでこの作品が本来もっと別の作品の一部になるべき未完成のものであったことを認めている。
- 5) トマス・ホブズを指すという説がある。後に詳述するようにこの講話はホブズ主義者の「著者」によって書かれたという想定である。
- 6) Thomas L. Canavan, "Robert Burton, Jonathan Swift, and the Tradition of Anti-Puritan Invective", *Journal of the History of Ideas*, 34, (1973), p. 227-42. 参照。

- また Phillip Harth, *Swift and Anglican Rationalism: The Religious Background of A Tale of a Tub* (Chicago University of Chicago Press, 1961) では著者はバートンからスウィフトにいたる反ピューリタン文学の系譜をたどり、ヘンリー・モアの作品が『桶物語』における「神がかりの熱狂」に対する攻撃の背景になっていると述べている。モアはすでに身体の下部器官から生じた蒸気が頭に上り、動物としての能力に変更を来たとし、「熱狂」の原因を蒸気の過剰に求めている。
- 7) 『スウィフト政治・宗教論集』(前掲書) p.293-4.
  - 8) ただし, M. H. Nicolson などの主張によれば, スウィフトはデカルト・ニュートン以降の当時の「新科学」の知をかなり高度に理解していた。
  - 9) William Empson, *Some Versions of Pastoral*, (London: The Hogarth Press, 1986). p.60. エンプソン, 『牧歌の諸変奏』柴田稔彦訳(研究社, 1982) p.64-5.
  - 10) デカルト, 『方法序説・情念論』, 野田又夫訳(中公文庫, 1974) p.95-137. を参照した。
  - 11) Thomas Hobbes, *Leviathan* ed. C. B. MacPherson (Harmondsworth: Penguin Books, 1968). ホッブズ, 『リヴァイアサン』, 水田洋, 田中浩共訳(河出書房, 1966)
  - 12) 1651年の初版のタイトルページに描かれる「王」像の胴と腕は小さな人間の集合からなっている。
  - 13) 『スウィフト政治・宗教論集』(前掲書), p.204.
  - 14) Everett Zimmerman, *Swift's Narrative Satires: Author and Authority*, (Ithaca: Cornell University Press, 1983). 『桶物語』等の思想的(認識論的)背景について簡潔な説明が得られる。
  - 15) Dennis Donoghue, *Jonathan Swift: A Critical Introduction* (Cambridge: University Press, 1969)
  - 16) David Nokes, "'Hack at Tom Poley's: Swift's Use of Puns'", *The Art of Jonathan Swift*, ed. Clive Probyn, (London: Vision, 1978) p.43-56. and *Jonathan Swift: A Hypocrite Reversed*, (Oxford: Oxford University Press, 1987), p.49-52.
  - 17) Empson, *ibid.*
  - 18) Norman O. Brown, *Life Against Death*, (Middletown: Wesleyan University Press, 1959). N. O. ブラウン, 『エロスとタナトス』, 秋山さと子訳(竹内書店新社, 1970), p.185-208.
  - 19) フロイト, 『夢判断』(上), 高橋義孝訳(新潮社, 1969) p.357-400. 参照。
  - 20) Swift, *ibid.*, p.54. 『政治・宗教論集』, p.124.
  - 21) ラプラランシュ/ポンタリス, 『精神分析用語辞典』, 村上仁監訳(みすず書房, 1977). 「圧縮」p.3, 「置き換え」p.34.